

## 明日への伝言

海岸公園冒険広場の再開までの取り組みなどについて、プレリーダーの根本先生さんと岩淵健史さんにお話を伺いました。



▲海岸公園冒険広場

## 安心できる子どもたちの居場所を

冒険広場を津波が襲ったのは、避難してきた地域の方を一番高い展望台に案内し、防寒着などを運んでいたときでした。根本さんは「バキバキと周囲の松林がなぎ倒されていく音が聞こえ、リヤカーを放り出し、展望台へ駆け上がりました」と振り返ります。濁流にのまれ、辺り一面水没。夕方に自衛隊のヘリコプターに救助されるも「現実ではないような光景が目の前に広がり、ここに遊びに来ていた子どもたちや地域の方々が無事かどうか本当に心配でした」と根本さん。甚大な被害を受け、冒険広場は休園を余儀なくされます。岩淵さんは、子どもたちの安否を確かめるため、SNSを活用して情報を集めたほか、避難所にも足を運びました。「子どもたちが避難所の片隅で小さくなっている姿を見て、居場所をつくりたいと思った」と岩淵さん。自分たちにできることは、子どもたちが自分の時間を過ごせる場所をつくることだと確認し、5月



▲被災した中野小学校が併設されていた、中野栄小学校の校庭で開催された出張あそび場

1日に六郷小学校で「出張あそび場」を開始します。根本さんは「まずは長く続ける、少なくとも冒険広場が再開するまでは地域から離れないという決意だった」と話します。

あそび場には、さまざまな材料や道具を準備。子どもたちは、ロープ等を使って自由に遊んだり、おしゃべりしたりと思いに過ごしました。

あそび場は、場所を増やし、定期的に開催することに。「生活が落ち着かない日々にはイライラして当たり前散らす子もいましたが、感情を表に出せるほうが安心できました。変化がないようでも緊急地震速報に急体が硬直するなど、精神的なダメージを負っている子ども多いと感じました」と岩淵さん。安心できる居場所のできることをすることで、心のケアにつなげたいという思いもありました。仮設住宅や復興公営住宅など、生活の拠点が移行するのに合わせて、出張あそび場の活動は続きます。

## 生きる力を育むあそび場づくり

冒険広場は、震災から7年後の平成30年に再開。しかし、複雑な思い

もあったそう。「出張あそび場を開めなければならず、来ていた子どもたちのことを思うと葛藤がありました」と岩淵さん。最終的に一部のあそび場は継続することとなりました。冒険広場には新たに避難の丘が整備され、津波で流された松の木など震災の痕跡も残っています。「公園自体に震災を伝えるという新たな役割が加わったと思います」と岩淵さん。沿岸地域の状況は大きく変わりましたが、震災で生き残った藍の種を育て、地元の方を講師に藍染め体験を行うなど、地域を知ってもらうための取り組みも行っています。

冒険広場が再開して良かったと思ってももらえる場にしたいと語るお二人。岩淵さんは「子どもたちが、自分が思い描いたことを自由に実現できる場所として続けていければ」と話します。「かつては身近な場所で自由に遊びながら出会いや経験を積むことで、自然に生きていく力を身に付けていました。地域に学びながら、やりたいことをやって、生きる力が身に付く。そんな場にしたいですね」と根本さん。各地にあそび場をつくっていったらと、子どもたちの笑顔が輝く未来を見つめていました。



▲根本さん(左)と岩淵さん(右)

指定管理者として、「海岸公園冒険広場」を運営。若林区の海岸線から約300メートルの場所に位置する冒険広場は、津波で被災し、休園しましたが、平成30年に再開しました。子ども自身がやりたいことを見つけ、自由に遊べる場づくりを通じて、健やかな育ちを支援しています。